

戦後北海道の靖国神社遺児参拝―木村崇さんに聞く

靖国遺児参拝 戦前と戦後の連続 5

松岡 勲

木村崇さんとの出会い

私が木村崇さんのことを知ったのは、木村さんが『週刊金曜日』（二〇二一年六月二五日）書かれた権未知子著『十七歳の旅 余市、北海道、日本』（北海道新聞社）についての書評「五感を総動員して空間から価値をつかむ」を読んだからだだった。この記事を私が靖国神社遺児参拝の歴史を調べていることを知る埼玉の友人、山際敏和さんが「こんな集団参拝に触れた記事があったよ。」という手紙とともに送ってくれた。

木村さんの書評の中に「著者は高校卒業まで余市町で育ったという。私は旭川出身、同じく一八歳で道外にでた。」とあった。そして最後に「ただ著者の感性とはズレている点が二つ。私は元号と神社には違和感を抱く。遺児として連れて行かれた靖国神社、旧満州で見た神社の痕跡。それらと大本で繋がっている天皇制。権さんごめんなさい。」と締めくけられていた。この文章から木村さんが私と共通の靖国遺児参拝の体験者であることを知り、後段の文章に私の考えと共振するものを感じた。ぜひ連絡を取りたいと思った。

それで『週刊金曜日』に木村さんのことを問い合わせることにした。私が以前に取材を受けたことのあるフリーライターで『週刊金曜日』に記事を書かれている平野次郎さんに「木村崇さんの連絡先」を問い合わせてもらった。『週刊金曜日』編集部から木村さんに連絡が行き、その後、木村さんとメールによる交流が始まった。

木村さんの「靖国体験」

北海道での遺児参拝体験についての木村さんからの最初の返事には次のようにあった。

拙文に関心を持っていただきありがとうございます。私は貴方ほど鮮明に靖国神社参拝を記憶している訳ではありませんし、靖国神社について系統的に調べたこともありません。忌まじいという感情が先に立ってしまい、ちゃんと向き合うことを避けてきたのだと思います。中学三年の夏（一九五九年八月）、遺族会からの推薦で北海道中から集められた遺児たち二百人以上が札

幌に集合し、鈍行列車で上京しました。北海道では体験したことのない余りの暑さに閉口しました。神主の話はよく覚えていませんが、母の口からは聞いたことがないような「英霊賛美」で、寂然とはしませんでした。でも周囲の遺児たちから鳴き声が次第に広がっていったので、私もなんとなくもらい泣きました。初めに泣きだしたのは、戦死した父親の記憶がある児たちだったのではないでしょうか。私は生後二、三ヶ月で別れていますから、仏壇の遺影しか知りません。つまり、生きた肉親を失った記憶がないのです。母にはしつこく父のことを聞きだしましたが、新婚の楽しいことの記憶しか聞き出せませんでした。ここ十数年の間にサハリンや旧満州を訪れる機会が増え、神社の跡を各地で見かけました。護国神社の残骸も見ました。神社の役割についていやでも考えざるを得ませんでした。父は満州の関東軍に所属していました。見合いと結婚のため一月半の休暇を得て、故郷の旭川へ戻り結婚式を挙げたあと、帰路は「新婚旅行」だったようです。その途中靖国神社にも参拝したという話は母から聞いたことがあります。父にはおそらく天皇陛下のお役に立ちたいという気持ちはあったでしょうが、「戦死」のふた文字がよぎったかどうか。母の口ぶりからする限り、少なくとも母の方にはその二年後に迎える悲劇は想像してはいなかったのではないかと思います。（中略）貴方のご関心には十分お応えできないかもしれませんが、以上が私の「靖国体験」です。遺族会という組織、生きて帰ってきた元軍人たちのさまざまな団体の立ち位置、抑留体験者や引き上げ者の記憶などなお、しつかり向き会うべき問題は今もたくさんあると思います。何かお手伝いすることがありましたら協力したいと

思います。

木村さんの返事を読み大変うれしく感じた。私が中学三年の時の靖国神社遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて（第十二集）』（大阪府遺族連合会、一九五九年三月刊）を再発見したのは、靖国合祀取消訴訟大阪高裁結審（二〇一〇年六月）直前のことだった。文集に書いた私の文章「私はなんとなく父は立派な死に方をしたんだなあと思った。」に身震いした。その後、私は戦後の靖国遺児参拝を調べ始めた。そこで一九五八年当時の遺児参拝の参加者を探して会い、参拝に参加してどんな感想を持ったかを聞いたが、当時の記憶があまりないか、特段に参拝についての違和感がなかったかのどちらかだった。私が遺児参拝に（現在の地点からであるが）違和感を持つのは感覚が違った。また当時の私の担任や先生や三年生の教員も探し、「遺児参拝について覚えておられることはないか？」と尋ねてみたが、「遺児参拝があつたことや松岡君が参加していたことも全く知らなかった。」という返事で、がっかりした。

これまで遺児参拝について調べてきたが、私と同世代で遺児参拝体験があり、かつ靖国参拝に違和感を持った人に出会ったことはなかった。木村さんがその最初の出会いとなるのではないかと予感を強くした。

北海道からの靖国遺児参拝

木村崇さんは一九四四年六月生まれで（私は一九四四年三月生



北海道 遺児社会見学団

靖国神社参拝記念

昭和34年 8月 7日

まだだ、私より一学年下になるが、年齢は三ヶ月の差しかなく、同世代だ。

戦没者遺児の靖国神社参拝は、日本の独立後の一九五二年から全国の都道府県行政と各地の遺族会によって全国的に行われ、一九五〇年代終わり頃まで続いた。北海道でも同様にこの時期に遺児参拝が行われた。私の手元には、木村さんの参加された時期とは違うが、北海道遺族連合会編の遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて』（一九五五年十月刊）がある。この文集は北海道の旭川市で靖国問題を取り組んでおられる相馬宏さんをお願いして、旭川市立図書館で複写してもらい、入手したものだ。

文集の冒頭には「天皇陛下より賜った追悼の言葉」があり、「今次の相つぐ戦乱のため、戦陣に死し、職域に殉じ又非命にたおれたものは、挙げて数うべくもない。衷心その人々を悼み、その遺族を思うて、常に憂心やくが如きものがある。（後略）」が置かれている。これは一九五二年五月二日の政府主催全国戦没者追悼式での天皇の言葉である。ここから戦後でも天皇制と靖国遺児参拝、遺族会が不可分であったことが分かる。

北海道の遺児参拝について、先の文集で北海道遺族会会長、岡崎登は一九五四年九月一九日付けで次のように書いている。「全道中学三年の遺児の総数は千三、四百の多きに上るのであるが経費その他の関係で其の内から約十分の一即ち百五十名を選び出し第一回遺児参拝団を作り本日茲に懐かしのお父さんと社頭対面をする事となったのである。」木村さんの参拝参加が一九五九年だから、北海道でも遺児参拝は一九五〇年代終わり頃まで続けられたと推測される。先の文集には一二八人の参加者氏名が掲載され

ている。木村さんの出身地旭川市からは一名が参加している。

父・木村多一と満州、フィリピンでの戦死

木村崇さんはロシア文学者、京都大学名誉教授で、退官後は盛岡市にお住まいだった。遠方であり、コロナ禍の状況でもあり、お目にかかることは困難だった。それで、私からメールで木村さんに質問をし、回答をいただいた。詳細で心のこもった返事をいただいた。以下はその回答である。（なお木村さんから回答以外にいただいた文章も引用する。）

木村さんの生年月はいつで、お生まれになった所はどこですか。お父様の生年はいつですか。その当時、お父様は満州で軍隊に志願されたことですが、お父様の戦死までの経緯について、お教えください。

私は一九四四年六月一日生まれです。戸籍抄本に記載されている私の出生地は「満洲国東満総省勃利（ぼつり、中国語で「ボリー」）県勃利街」となっています。国際的な建前上、満洲国は外国だったはずなのに日本内地での出生届手続とまったく違いがないことに、自分の戸籍抄本をあらためて見て奇異に思いました。日本からすれば「満洲国」は日本そのものと変わらぬ存在だったわけです。当時の朝鮮や台湾、南洋諸島ではどうだったのでしょうか。調べてみたいと思っています。

母が死亡した時（一九八九年三月末）、遺産相続の必要上父の

除籍謄本を取り寄せたのですが、生年月日をメモしておくことを失念しました。生年は確か一九一六年（常日頃母から大正五年生まれと聞かされておりました）で、生まれ月は一月だったと思いますが、何日かまでは覚えていません。

父の出生地も正確にはわかりませんが（これから述べることはすべて、生前いろいろな人々から聞いた断片的記憶から私が推定したものです）、青森県南津軽郡田舎館村の近辺であつただろうと推定されます。父の生母にあたる人（つまり私の父方の祖母）は、その夫が「画家」を目指して「蒸発」したため（これは、中学校の修学旅行で訪れた弘前で、父の異父姉に当たる伯母から聞かされたことですが、何しろ純然たる津軽弁だったためよく理解できず、推定要素が混じっているかもしれません）、妻に先立たれた相馬という姓の人（私の父方の実祖父、農業）に求められて結婚し父を身籠ったものの、産み落とされた私の父は入籍できず、蒸発した人の「木村」姓の戸籍に入つたまま、相馬何某の末子として育てられたのだそうです。

高等小学校卒業後、父「木村多一」は北海道旭川の登鶴酒造の酒造り職人になつていた次兄の相馬友次郎を頼つてしばらくの間酒造の見習い職人になつていたようです。農家の田畑は長男しか継げませんので、末っ子の父にはほかに道はなかったでしょう。しかし軍国化が盛んになってきた時期ということもあって、「酒職人などというつまらない職業ではない立派な生き方をせよ」との兄友次郎の勧めで（これは生前の叔父の友次郎さんから直に聞きました）職業軍人への道を選択し、二等兵として旭川の第七師団に入隊したようです。その後満洲にあつた関東軍に転属された

時期は分かりません。ノモンハンに駆り出されたかは不明です（母からノモンハンという語は一度も聞いたことはありませんので、おそらく不参加でしょう。もしかしたら第七師団から関東軍への転属はノモンハン事件で生じた欠員補充のためだったかもしれない）。満州で適齢期を迎えたため、写真見合いをして、旭川近郊の鷹栖村の農家、吉本六右衛門の四女きみ（のちの私の母）と結婚することになりました。

仏壇から、木村多一（当時の位は陸軍曹長）に「見合い」のための一ヶ月半の「長期休暇」を許可するという「在外者特別休暇並旅行実施ノ件」という書類が見つかりました。帰り道は文字どおりの新婚旅行となり、旅好きの母には最高の旅行だったようです。私が中学生ぐらいの時、「なんで軍人なんかと結婚したのか」と聞いたところ、ニコツとして「外地に憧れていたから」と答えたのを覚えています。確か古い写真をめくっている時、靖国神社の鳥居前で撮った二人の新婚姿が見つかりました。その後京都や奈良も巡って、ゆっくり勃利に戻ったようです。一九四三年四月末、勃利に戻った新婚夫婦は官舎を与えられ、満洲人の女中さん（子守？）もいたそうです。

母からはここに書いたすべてのことを生前聞いていたわけではなく、没後に見つかった手紙や書類からわかった事実の方が多いです。母からは、フィリピンに向かう途中で父の乗った船が撃沈され、台湾に流れ着いたという話は聞きました。フィリピンについてからはしばらく文通ができたようです。戦地からのハガキは、戦地から届く検閲済み通信文のステレオタイプでした。それも母の死後仏壇の奥から見つかったものですが、生前母はなぜか私に

は見せませんでした。理由は不明です。

母・木村キミと父との結婚

お母様の生年はいつですか。お母様が結婚され、木村さんを生まれた当時のお母さんのことについて、お聞かせください。

母は一九二一年七月二日生まれです。結婚は、父の「休暇許可」の時期から推定して、農閑期だった一九四三年三月中のいつかだと思われます。母は高等小学校卒業後から結婚までの一〇年ほどは、多分農家であった実家の家事に従事していたと思われます。妹がまだ幼い頃、母親（つまり私の祖母）が結核患者だった次男の看病中に感染し早く死亡したようです。残された妹の養育などもあり、家事に人手が必要だったことは想像できます。本人は旭川に出て電話交換手になりたかったと私に漏らしたことがあります。母の長兄は勉強がよくでき（兄弟姉妹いずれも田舎の小学校では優等生で、卒業式に表彰されたそうです）、こっそり世界文学全集などを買って隠し持っていたそうで、母も他の姉妹たちも、それを隠れて盗み読んだそうです。母たちの父親（つまり私の祖父）は幼少時に富山県黒部市から一家で開拓のため、農地を分譲された北海道の鷹栖村に移り住んだそうで、ちゃんとした教育も受けられなかった（あるいは通学拒否？）と思われます。そのせいか、「学がつくと農業を嫌がるから百姓に学はいらない」という頑固者でした。本人はろくに文字が書けず、つけていた農業日誌は自分にしか解読できない奇妙な記号で書かれていたとい

うことを上から二番目の叔母から聞いたことがあります。文字習得という点では、父の実兄の友次郎さんも同じで、地べたにかがみ込んでいつも棒切れで漢字を書いて独学している姿を目撃したという人が何人もいました。私の知っている頃の叔父の友次郎さんは、白衣を着て実験室で試験管やビーカーに囲まれた立派な杜氏さんでした。

母はすぐに私を身籠りましたが、お手伝いさんもいるし陸軍病院もあったので出産に不安はなかったとのことです。父は頻繁に演習に出かけていたと聞きました。満州での新婚生活がどんなに楽しかったか、と言う話はよく聞かされました。私の記憶では、母は料理が一番苦手だったはずなのですが、演習から帰った父に天ぷらを揚げてやると、うまいうまいといって腹一杯になるまで食べたという話はよく聞きました。父の生い立ちを考えると、家族そろって食卓をかこみ、天ぷらを突き合うという経験がとぼしかったのではないかと推測します。

仏壇から母にあてた父の封書や葉書も見つかった。靖国神社参拝のために戦没者遺児集団の数百人の一員として、旭川から東京までの鈍行列車に行かされた時だった気がする。(中略) 読んで見ると、「おまえのセーターは俺が持つて行くから途中で寒いだろうと思ふけれど、我慢して呉れ。お前のはだの香りが残って居るからね」と書かれている。それはそうだろう、こんな手紙、物心がつき始めた息子には見せたくないからはずだ。でも処分しなかったのはいつか見てほしかったからだろうか。(『やっと「生」地巡礼を果たして』“Ce

Be p (セーヴェル)” 第三一号、二〇一五年三月、ハルビン・ウラジオストクを語る会刊)

満州からの引き揚げ

敗戦時はお母さんと満州から引き揚げられたのですか。お母さんに聞いておられることがありましたら、お願いします。

満洲からの引揚は敗戦の前年です。一九四四年八月中に勃利を立った父は、おそらく輸送船の都合がはかどらなかつたせいで、朝鮮の釜山で長期の足止めを食らったようです。母は、出征する軍人の残された家族の内地引き上げを担当する人たちの助けを借りて、引越し準備をしたようです。母の実家に残されていた引越し荷物を見てその量に驚かされました。ラジオや蓄音機、かなりの量の食器類(洒落た紅茶セットまでも)がありました。母に抱かれて釜山についた時に、父は残念ながら既に門司を経てフイリピンに向かつていたようです。

下関から旭川までの汽車の旅は、一九四四年の一〇月頃ということもあり、大して支障はなかつたようです。おっぱいが出るようにと、母は乗り合わせになった方からいろいろ食べ物を持たせたとのことです。それから一年もしないうちに、満洲に侵攻したソ連軍によって攻撃された勃利で起こった開拓団の集団自決の惨劇を思うと、なんとも申し訳ない気持ちになってしまいます。

靖国参拝の記憶

中学三年生時の靖国遺児参拝について覚えておられることはどんなことですか。旭川市から一緒に行かれた同級生はおられましたか。その当時、参拝についてどのようなことを感じられましたか。今から考えると、遺児参拝をどう思われますか。

靖国参拝は確か夏休みに入る前後に母から聞かされたと思います。おそらく地元の遺族会で人選したのでしょうが、何を基準に選んだのか、経緯は聞かされませんでした。北海道中から集まる遺児たちが一度札幌の道庁に全員集結する、といわれたような気がします。旭川から一緒に行った同級生がいたかどうか、不思議にも全く記憶がありません。旭川から札幌まで一人で行ったとは思えませんが、引率されていたのかどうかも覚えていないのです。でもよく考えてみると、不安を覚えた記憶がまったくないところからすると、数人まとめてちゃんとサポートされていたのではなにかと思います。

札幌から乗った汽車は各駅停車でした。到着までほぼ二昼夜近くかかったはずで、弁当は毎回同じ中身の折詰駅弁が配られました。東北本線は首都圏に近づくとも別の町に入ったのに街並みが切れ目なく続くのが不思議でした。また蒸気機関車でなく電車の通る区間はレールや枕木が赤錆で粉まみれになっているのに気味悪い思いをしました。宿は上野駅近くの旅館でした。窓を開けると手の届きそうな所に隣の建物の壁があるのでびびくりしたのを覚えています。

靖国神社を訪れた当日のことも、あまり細部は記憶しません。札幌から同行した若い道庁職員たちの案内に従って遺児たちは、

いくつかのグループに分かれて拝殿の奥深くまで招かれました。その場所が何という名のどういう場所か覚えてはいませんが、靴を脱いで上がったので、かなり丁寧な扱いをされているような気がしました。女子たちの中に早速泣きじゃくり始めるものが出て、そのうち私もなんとなくもらい泣きしました。身分の高そうな神官（正式な職名を紹介されたように思うが、覚えていません）が、わかりやすい言葉遣いで、先の戦争で戦死された君たちの父親たちは今は神として手厚く祀られているといった趣旨のことを聞かされたのではないかと思います。その上でお参りの作法の指導に基づいて揃って祈りを捧げました。母一人子一人の生活に慣れ親しんでいたこと、父の記憶が皆無なことなどから、祈りをあげている間これといった感慨が湧き上がることはありませんでした。遺児同士が感想を述べ合うこともなかったように思います。気持ちちはみなすでに東京見物の方に移っていたように思います。その日の夜、私たちのグループの引率者が皆をこっそり後樂園の野球ナイター見物に誘ってくれました。ホームランが次々に打ち上がるので興奮しました。これが唯一肯定的な記憶です。翌日は仲良しになった、たしか紋別から来たという子と二人で東京見物をしました。昼に入った喫茶店のおばさんが旭川出身で、すこしおまけしてもらったように思います。

帰りも同じ鈍行列車、同じ駅弁。出発地の上野はうんざりするような暑さだったのに、函館に着いた時はすでに、ポロシャツ一枚では寒いくらいでした。旭川はすっかり秋でした。

旭川の地元では靖国神社と同じ趣旨で作られた護国神社が近くにあり、お祭りの行事も楽しみで身近に感じていました。母

は二、三歳だった私を義兄友次郎さんの奥さんに預けて洋裁を習いに通い、一年弱で独立し旭橋のたもとに六畳一間を借りて独立しました。朝は母と並んで仏壇にご飯と水をあげ、神棚もお参りさせられました。残されたアルバムの写真（どれも赤っぽく変色していて、随分昔に撮ったものであろうと思っていました）をみて、満洲の生活を想像していました。しかし靖国参拝から戻った頃から、私は自分たち親子の歴史や日本の国の歩みについて、急速に目が開かれていったような気がします。旭川で一番大きな書店で、カップブックス版の『三光作戦』を見つけ、数日通って読破しました。靖国神社を体験した後ですから、考えさせられる事が次々に出てきたと記憶します。中学校の職員室の隣にあった談話室で「今日のソ連邦」という雑誌をみつけ、私は毎号奇異な思いをおぼえながら読みました。さしせまる「日米安保条約改定」問題などにも関心を抱き始めました。

父の靖国合祀

木村さんは靖国神社、靖国合祀についてどのように考えられますか。

「自分史」的にはどうやら靖国参拝が大きな転換点になっているような気がします。ほとんどの宗教は「天国」と「地獄」、「神」と「悪魔」という二項対立的な概念を、疑念の余地なき実態としてその教義を構築しています。私はもの心ついてから、このような思考様式に一度も囚われた事がないように思います。生まれる

前に私個人としては何も存在しなかったように（前世はゴキブリであつたといわれても、それは私にとつて脅しにはなりません）、死後も何も残らないし、何も起きないことは自明だからです。こういう議論になったとき「生まれながらの無神論者」を名乗ったこともありましたが、余計な反発を招くことが多いので、いつしか隠す癖ができました。

「旧統一教会」的な教義は「サタン」をその教義の決定的仕掛け装置として位置付けています。これに対して仏教の一部は「地獄」による脅迫よりも「極楽浄土」への「希望」で教義に説得力を持たせているような気がします。生前に善行をつむことによつて死後「仏になる可能性」を説く宗派もあるようです。靖国神社は戦死すれば「神」になりうるのだとして、自分の生命を国家のために捧げることを推奨する理屈をうち出したわけです。

ロシアによるウクライナ侵略からもわかるように、ロシアの若者たちを戦場に駆り出してその命の危険にさらさせるためには、動員強制だけでは不十分です。そこで死んだ後、その「功績」を永遠に称える装置が求められます。ロシアには、そんな場所がない所に、それこそうんざりするほどたくさん存在します。戦死者に、その榮譽をたたえ「永遠に」ねんごろに葬る仕掛けは、どの国にもあります。日本はたまたま一神教が主流ではなく、さいわい八百万の神のおわす国ですから、「神」はいくらでも作り出す事ができただけです。

満洲への帰路、靖国神社を参拝した新婚の木村夫妻は何を念じたでしょうか。おそらく父の方は戦死の可能性について、多少考えるところがあつたでしょう。ただ満洲の関東軍はその当時も

つばら、対ソ戦争にそなえていたでしょうから、日々劣勢となっていく太平洋の戦場に駆り出されるとは思っていなかったかもしれません。最終的にルソン島の戦場に送られると知った時（おそらくは釜山で）、父多一は、どうしてももう一度母と私を見ておきたかったのだと思います。こういう生きた国民の切なる思いに、靖国神社は何の慰めにもならないのは確かです。

ノモンハン事件

「ノモンハン」についての木村さんの文章をいただきましたが、木村さんがノモンハン事件に関心を向けられたのはなぜですか。お父さんが関東軍の軍人だったこととの関連についてお聞かせ下さい。ノモンハン事件は現代に何を提起しているとお考えですか。

村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』を読んだこと、一九七〇年代の始め、県議会・市町村議会の議員さんたちの団体がソ連を訪問した際（私はすでに中京大学に勤めていましたが通訳として同行）、団長さんだった石川県議会の議長さんだった方（お名前は失念）から、実はノモンハンに動員された兵士だったという話を聞いたことが、印象に残ったからです。その後私が深く関わることになった「日本国境地域研究センター」が企画した第四回中露国境旅行に加わった事がノモンハンについて多少突っ込んで考えるきっかけになりました。私は関東軍のはねあがり将校たちの思考様式や行動規範に、日本文化の底流に受け継がれてきたおぞましいものを感じ、それを明らかにしたいと思ったわけです。今

日でも、政界や経済界の妙に自信にあふれたリーダーたちの中には、多少姿・形は異なりますが、脈々と受け継がれているものがあるような気がします。知的レベルの違いはあれど、安倍晋三の人を動かす「手管」にも似たものを感じます。

ソ連側は「ノモンハン事件」ではなく、「ハルビンゴル（ハルハ川）戦争」と呼んでいます。その違いがどうしても気になり、少しづつ関連資料に目を通すようになりました。現在ブーチンはウクライナ「侵略」を、「戦争」という語を避けて「特別軍事作戦」とよび、「戦争」と呼ぶものを処罰すると脅しています。これのちょうど裏返しで、当時の関東軍にはそれだけ「やましい」ところがあったわけです。調べていきますと、関東軍（いや、当時の日本軍全体）にはびこっていたあらゆる負の兆候がみごとに揃っていることに気づきました。ノモンハンの戦場には旭川の第七師団から派遣された部隊から多数投入され、多くの犠牲者が出ました。父は「ノモンハン事件」に直接関与したとは思われませんが、あの関東軍の悪き「伝統」にどの程度染まっていたのか、調べようありませんが、気になるところです。

ところで松岡さんは世界の他の国で遺児たちがどのような扱いを受けているか、興味はありますか。ロシアの事情を詳しく知る私は、日本の場合、私たちの世代の後に「遺児」はいないので、国家によるおぞましい「愛国教育」からはすこし自由な気がします。ロシアでは、アフガンをはじめ、チェチェン、グルジア、シリアでの戦死者さえも、麗々しく祀られ、故郷の誇るべき英雄として名前と経歴、「功績」が四六時中公共の場（出身校などにも）飾られています。韓国でも似たような光景を見ました。

十数年前、父が戦死した地（フィリピン）を訪れることができた。それは母が生前実現できなかった願望をかなえる旅でもあった。現地で思いも寄らぬ事実を知った。ルソン島北部山岳地帯の段々畑は日米の激戦地と化し、山岳民が犠牲になったという碑文を見たのだ。犠牲者総数は日米両国の戦死者を合わせた数をはるかに超えたとも書いてあった。私の父は砲弾に碎け散った。父は大死にしたのだと思った。意味なく死んだだけではなく、多くの罪なき人々を巻き添えにして・・・ただ、大死にした人々は意に染まぬ行為を強いられた犠牲者でもあり、より一層の鎮魂を求めている。日満、ソ蒙の兵隊さんたちもまた・・・。（ノモハン事件から八〇年 現地を訪ねて ハルハル川の蜃気楼」、『週刊金曜日』二〇一九年一二月六日）

ロシア文学と私

木村さんがロシア文学を専攻された背景に、ご自身の生育史（お父さんが戦死されたこと、再婚せずに木村さんを育ててくれたお母さんへの思い等）と何か関わりがありますでしょうか。

中学生の私が、靖国参拝から帰った後、ソ連という奇妙な国が気になりました。旭川には当時、樺太からの引揚者が多数いて、ソ連は憎まれる国でした。新聞には連日漁船拿捕の報道が載っていました。同じ連合国軍なのに、原爆を落としたアメリカを悪様に言う人は皆無でした。親戚のおじさんたちと話しても、根

っからの共産主義アレルギー（「アカ」という言葉の語気にはただならぬものがありました）もさりながら、「日ソ中立条約」の一方的破棄による宣戦布告が、ソ連嫌いの人たちに共通の心象を形成していました。資本家は戦後の農地解放によってかなり多くの土地を小作人だった人たちに譲り渡しました。それでもその政策を押し付けたGHQではなく、戦前小作争議を先導した「アカ」が憎いと言う心象が広まっているのを私は肌で感じました。したがって「ソ連」は「怖いもの見たさ」の対象のようなものでした。

「今日のソ連邦」を読むうちに、狸穴のソ連大使館へソ連へは留学できるかと、問合せみることにしました。母から止められたという記憶はないので、黙認していたのでしょうか。すると一九六〇年の九月に、半数が世界の発展途上国か選ばれた留学生、半数がソ連各共和国の学生からなる「民族友好大学」という高等教育機関がモスクワにできること、日本は発展途上国ではないが、熱心な友好運動の努力をみとめて、定員枠があるとの返事をもらいました。それで一九六三年には日本の大学とは別に、民族友好大学も受験することにしました。一九六三年四月、私は東北大学文学部に入學しましたが、連休明けに母から、ソ連留学ができることになったが、手続きを進める気があるかと問い合わせてきました。母はその合格通知を握り潰したようですが、後に私との間に悶着が生じることを恐れて、ぎりぎりのタイミングで知らせてきたようです。私は東北大学に何も未練がなく、留学する道を選択しました。

ロシア文学への関心が生まれたのは高校に入ってから、文芸評論活動をしていたある先生からの影響です。受験期でしたから本

格的に読み漁ったわけではありません。友人には高校教師の父親から本を取り上げられるほどの文学好きもいましたが。母は普段本を読む余裕がありませんでした。正月の休みにすぐ上の姉の一家を訪ねる習慣がありました。そんな時母はかならず文庫本の小説を買って車中ずつと読み耽っていました。それが米川正夫訳のロシアの小説だった知ってちよつと意外に思ったことがあります。そんな母ですから（外地への憧れは私にも共通します）、私がソ連留学することについても、半分は賛成していたのではないかと思います。

ロシア文学を勉強したいと考えたのは、その当時ソ連留学で何か多少なりとも価値あるものを得てこようとすれば、まずロシア語、そしてロシア語を深いところで習得するにはロシア文学を通じて接近するのが「近道」だと考えたからです。ですから動機に多少「不純さ」があつたことは否めません。父の戦死とか、母の思いとかに関連があるかどうかはよく分かりません。どうあれその選択が間違っていたとは思いません。当時周りの人たちからは「共産主義思想」にかぶれたからだろうと言われましたが、ソ連が当時唱えていた「社会主義」は矛盾だらけで、三か月ほど住むと、実態の酷さはすぐにわかりました。まして「共産主義」はどういう実現不可能なユートピアでしかないと思いました。ただ、その理念の崇高さは、実現可能性が限りなくゼロだとしても、まじめな思索の対象とする意義はあるだろうと思います。

ロシアのウクライナ侵攻

木村さんはロシアのウクライナ侵攻についてどのようなにお考えですか。ロシア文学者としての思いはどのようなものでしょうか。

これは実に変な質問です。ロシア文学やロシア語教育に携わる人間たちはいま本当に真剣にこの問題を考え始めています。政治や軍事を研究対象にしている人たちはわりと早く回答できると思いますが、広くロシア文化を考えてきた者たちにとっては、多少なりともまともな回答すら、今のところできそうにもありません。なにか、本当に根本の根本に立ち返って考え直さなければならぬと思っています。

ロシア文学者としては、やはりレフ・トルストイともう一度本気に向き合って問い続けるしかないと思っています。ロシアとウクライナの歴史についても、根本に立ち返って見直す必要があります。

トルストイには独自の信仰がありましたので、いわば「神との対話」が可能でした。私は無宗教ですから、徹底的に自分の理性のみを信頼して考えぬかなければなりません。そのさいの難問は「言語と民族」の問題です。多民族国家であるロシアに生きた人々を、そのふたつの切り口で理解しなければならぬのですが、はたしてどこから手をつけてよいものやら。

ロシア（帝国およびその後のソ連）に生活した人々が何を契機に「国民意識」を獲得したかという問題は、「ロシア文化」の形成過程を論ずる上で避けて通ることができない。ロシアの場合、二つの未曾有の大戦の記憶と結びついている点が特

徴的である。しかもそれは戦後かなりの時間を経た後、上からの視覚的操作をともなうて形作られたことを銘記しておく必要がある。(書評『ロシア文化 五五のキーワード』ロシア語ロシア文学研究第五四号)

戦争の記憶は、国家権力にとって国民意識の統合上利用価値のきわめて高いものだが、一方その記憶は国民一人一人の中に深く沈着していて、国家によって独占しきれない「聖域」でもある。大祖国戦争を女性の目で見つめ直したスヴェトラナ・アレクシエーヴィツチや一八二二年の祖国戦争を都市下層民の目であらえたタチヤナ・トルイチョワの仕事は(中略)、この視点を起点に国家規範の「国民意識」をのりこえようとするものとしてこのうえなく貴重である。(同上)

おわりに

今回の木村さんとのやり取りを通じて、たくさんことが共有できた。木村さんは「ノモハン事件」の所で、お父さんが戦死されたフイリピンを訪ねた時のことを書かれている。そこで「父は犬死にしたのだと思った。意味なく死んだだけでなく、多くの罪なき人々を巻き添えにして・・・ただ、犬死にした人々は意に染まぬ行為を強いられた犠牲者でもあり、より一層の鎮魂を求めている。」と。私も木村さんと同じ感情を持つ。木村さんはお父さんの戦死を被害者としてだけ捉えるのではなく、アジアの人々に対する「加害者」としての側面も見つめている。

私も大学一回生の時、同様の経験があった。一九六二年に大学に入ってしまったら、父が戦死して、お母さんが魚の行商をし、苦勞して育ててくれたという三重県尾鷲市出身の奥村と出会い、親しくなった。彼との話題は境遇が同じだったためか、「父と戦争」の話によくあった。そんななかで、彼は「僕らの父が戦死したことが礎となって、今の平和と民主主義の世の中があるんだ」と言った。しかし、僕はちがうと反論した。「僕らの父は戦地で人を殺しているから、犬死にと思う」と。意見は平行線のまま一致しなかった。彼は二回生になると、大学に姿を見せなくなり、その後、会わないままであった。

私のなかにも木村さんと同様に父の死がアジアの人々に対する加害者であるとの認識と(「犬死に」と突き放しきれない)父の喪失感との葛藤があり続けている。木村さんはお父さんの亡くなったフイリピンに出かけられたが、私はまだ中国・武漢近郊の父の戦死した場所に行けていない。ぜひその場所に立ちたいと思う。また機会を作り、木村さんにお目にかかり、お話をお伺いしたいと思っている。

(二〇二三・一・一〇)